

猫はドライフード派？ ウェットフード派？



湘南獣医師会 塩谷 香織

一般社団法人ペットフード協会(以下、PF協会)の2018年の調査によると、日本には964.9万頭の猫が

飼育されています。その猫たちはどのような食生活をおくっているのでしょうか？

市場には様々なキャットフードがあります。それらのフードは水分含有量の違いから、ウェットフード、セミモイストフード、ドライフードに区別されています。

PF協会の2018年全国犬猫飼育実態調査では、食事としてドライフードを中心に与えられている猫(与えられているフードの70%以上がドライフード)が全体の64.3%であることが示されています。すなわち64.3%の飼い主はドライフードをメインディッシュとし、ウェットフードはサイドディッシュ、もしくはトッピング的に利用していることが多く見えます。

このことは猫の健康管理にどんな影響があるのでしょうか？

食性と体の構造から、フードについて考えてみようと思います。

猫の食性と体の構造

動物の体は5大栄養素である、炭水化物、脂質、タンパク質、ビタミン、ミネラルを必要としています。私達はこれら栄養基準を満たした「総合栄養食」から主食のフードを選ぶ必要があります。

これら栄養素の必要量は、動物種により異なります。例えば、肉食動物の猫は、雑食動物の犬よりも高いタンパク質が必要です。犬のフードを猫の主食とすることは望ましくないという事です。

次に、猫の体の構造を考えてみましょう。猫の消化管は犬に比べ腸の長さが短く、胃が小さい

特徴があります。もともと単独で狩りをする猫は、自分よりはるかに小さな獲物しか捕まえないため、1日に何回も狩りをする必要があります。

猫は犬のように一度に大量摂取して「食いだめ」するのではなく、少量頻回摂取する食性であるといえます。

このことから、いつでも好きな時に少しずつ食べられるようにしておく給餌方法は、猫の習性にかなっていると思われれます。そのため、長時間室温放置ができないウェットフードではなく、置きエサとしてドライフードを利用して飼育している飼い主が多く存在していると思われれます。

キャットフードのタイプと飲水量

栄養素の定義を「動物が生きるために体外から摂取しなければなら

ないもの」とすると、水も立派な栄養素になります。

猫は水分の一部をフードから(ドライフードには通常8%程度、ウェットフードには80%程度)の水分が含まれる。残りを給水皿から摂取しています。ある調査では、ウェットフード給与群猫に比較してドライフード給与群猫では尿量が少なかったとの結果が認められました。つまり、ドライフードの猫はウェットフードの猫より水分摂取量が少なかったという事です。

元来、砂漠地帯で進化した猫は飲水量が少なくても耐えられるよう、腎機能が発達しています。すなわち尿中の水分排泄を最小限に抑えることが出来るのです。しかし尿量の少なさ(尿濃度の上昇)

は、猫の尿石症や腎疾患が多発する大きな原因ともなっています。

渴感に鈍感な猫にとつて水分摂取量を落とさせない事は、病気の予防の面から重要と考えられます。ウェットフードを上手に使うことは、水分補給の手助けになるかもしれません。

近年、キャットフードの種類が増え、様々なタイプからフードを選べるようになりました。嬉しい反面、選択肢が増えすぎたことで、何を選び、どのように与えたら良いのか悩むことがありますが、飼い主がフードの特徴や猫の食性を理解して適切なフードを選ぶことは、家族の一員である猫の健康管理に役立つのではないのでしょうか。(かまくら犬と猫の病院)

けるも

いと、活習慣

は早期に、全がります。

方へ、あなスを行